

Janet L. Abu-Lughod. *Before European Hegemony: The World System A.D. 1250-1350*. Oxford: Oxford University Press, 1989, 443p.

本書の著者ジャネット・L・アブー・ルゴドはアメリカの社会学者である。その序文によれば、彼女は都市社会学者として出発し、エジプトで中東の歴史と文化を学んだ後、その問題関心を他の第三世界へ広げたという。カイロに関する社会学的歴史研究 *Cairo: 1001 Years of the City Victorious* (Princeton, 1971) は、イスラーム都市研究の興隆の中で注目を受けた。1989年に刊行された本書は、翌年、アメリカ社会学会より Section Award for Distinguished Scholarship を与えられている。選考委員会は本書を、ウォーラーシュタインやブローデルに比肩する視野を持ち「近代世界システムのヨーロッパ中心主義的理解を再考せしめる」優れた著作と評している。

まず内容を紹介しよう。本書は3部構成をとっており、「13世紀の世界システム」を、ヨーロッパ、中東、アジアの3つのサブ・システムにわけて各1部に配する。さらに各部においてそれぞれ3つの性格の異なる地点を選んで各章において検討する。

イントロダクションである第1章で著者は、近代世界システムの出自の理解には、the period before European hegemony の調査が必要であると主張する。13世紀後半から14世紀前半を絶頂として、ヨーロッパと中国にまたがる、これまでにないほど多くの地域が、ひとつの交換システムに統合された。著者

は、これを「13世紀の世界システム」と位置づける。そして本書の課題を、13世紀の世界経済がどのように形成され、なぜ14世紀に躓いたのか、また、ヨーロッパが覇権を握った「近代世界システム」に13世紀のシステムがどの程度残存しているか、を検討することに設定する。

この問題を論じるにあたって著者は、近代資本主義の起源論や近代世界システムの時代区分論には関わらないと宣言する。本書の主題は「東洋よりも西洋に有利なシステムに移行したことに歴史的必然性は存在せず、東洋が近代世界システムの発祥地となることを妨げる歴史的必然性も存在しなかった(p.12)」ことを示すことである。これによって〈西洋の勃興〉が西洋独特の倫理、社会制度、西洋資本主義の独自性などによるものではなく、13-16世紀の移行期の世界システムにおける地政学的要因こそが西洋に勃興の機会を与えたと主張する。12-13世紀の時点ではヨーロッパは周縁として扱うのが正しいとし、このようにして著者は、西欧中心主義的な近代世界システム成立論を批判するのである。

本論に入って、まずヨーロッパ・サブ・システムを扱う第1部(第2章から第4章)では、織物をめぐる定期市の中心地であったシャンパーニュ地方、その生産地であったフランダース地方、地中海交易からアジアにまで進出したイタリア商人とヴェニス、ジェノヴァに焦点が当てられる。第2章シャンパーニュ地方では、その地が12-13世紀に遠隔貿易の中継点としての必要条件をすべて満

たしており、特にその支配者である伯爵たちが王や法王に対する独立性を維持するために市場としての環境を整備したことを指摘する。ところが伯爵たちの独立性の弱体化などで市場環境が失われると定期市も衰退した。このことから著者は、特定の場所が世界システム上「戦略上重要」であるかどうかを決定するのは、外在する地政学的な要因であるとする。第3章では1250-1320年のフランドール地方の織物工業について、その製品がシリアに達するなど「前近代世界システムにおいて、その重要性が絶頂に達した」ことを示す。ところが、イングランドからの輸入に依存していた原材料がイングランドの地場産業の勃興によって入手困難となると織物産業は衰退した。またその結果イタリア商人に依存していた資本が流出すると、ペストの流行もともなう、この地方は容易に衰退した。イタリア商人を扱う第4章では、十字軍交易とともに勃興したヴェニスとジェノヴァが東方への勢力拡大を競ったありさまを追い、両者の前資本主義的な経済体制を検討する。14世紀初頭にはビザンツと結ぶジェノヴァが黒海貿易を独占、マムルーク朝と結ぶヴェニスが紅海—インド洋貿易と地中海を接続させたが、1380年にはヴェニスが最終的勝利を収めた。しかし、その頃にはジェノヴァはポルトガルの台頭にさらされ、ヴェニスの交易路はパクス・モンゴリカの崩壊によって統一性を失うなど、彼らが制御できない遙か遠くの地域で発生した出来事が、彼らの衰退を決定づけた。

第2部（第5章から第7章）は中東の中央

アジア交易路、ペルシア湾交易路、紅海交易路を取り扱う。第5章ではモンゴル帝国と中央アジア交易路がチンギス・ハンによって一体性を与えられたこと、彼らは中継貿易地も工業生産地も通商機能も提供しなかったが、陸上交通に安全性と低コストをもたらす環境を創造したことを指摘する。これによって既存の国際交換システムにヨーロッパ商人が参入するようになったのである。しかし、そのシステムは、モンゴル国家の貢納寄生的性格や拡張主義的性格に由来する不安定性により、ペストという衝撃だけで容易に転倒した。第6章では、最も便利で安価であったペルシア湾路の衰退要因を、モンゴルによるバグダード破壊に加え、法王の異教徒通商禁令やアッカの陥落によってヨーロッパ商人がこの通商路から遠ざかったことであるとす。もっとも、タブリーズからホルムズに抜ける経路はイルハン国の振興策によって健在であったが、ガザン・ハンのムスリムへの改宗によってヨーロッパ商人はこの経路からも遠ざかった。このようにペルシア湾交易路の衰退は、世界システムの地政学的変化によるものである。第7章では13世紀末までに形成されたマムルーク朝とヴェニスとの間の独占通商体制を論じる。著者はイスラームのリバー（利潤）の禁止が資本主義の成長を抑制したとする説を否定してイスラームと商業の結びつきの深さや協業形態の発展を指摘。さらにマムルーク朝カイロの大国際商人であるカーリーミー商人の実態や、国家による商品作物の栽培とその経済への関与を検討する。一方、14世紀後半マムルーク朝の経済衰退の

根本には、エジプトが十字軍とモンゴルに脅かされて軍事国家を形成し、それを支える労働集約的生産を必要としたこと、その結果ペストの流行によって労働力が激減すると搾取の増大につながり、市民社会と経済制度の沈滞をもたらしたことがあるとする。

第3部（第8章から第10章）はインド洋沿いに、インド、東南アジア、中国を論ずる。第8章では南インドの東西海洋貿易航路上の地理的重要性を指摘する。インド西岸はグジャラート地方やマラーバル海岸がペルシア湾や紅海交易の重要な拠点であり、一方東岸のタミル国家では通商が豊かな農業生産物と結びつき、さらに織物工業を発展させた。しかし、インド自体は自己充足的であったがゆえに、国際交易で中心的な地位には立たなかったとする。第9章では東南アジアのマラカ海峡をとりあげ、中国への中継貿易国家としての地位が中国の交易政策によって大きく揺らぐことを示す。世界システムのネットワーク化によって海峡国家は従属国家から中継貿易国家へと変質した。最後に中国に関する第10章では、元から明初にかけて南方海上交易が隆盛し、鄭和の遠征などによって海上交通支配の時代を迎えていたにもかかわらず、1435年以降海上権力を放棄しポルトガルの進出を招いたことをうけて、〈なぜ中国は世界システム上の覇者となる道をとらなかったのか〉という問いが掲げられる。著者は中国の科学が非常に発達し、資本主義の発展に十分な経済制度が存在していたことから、西洋ではなく中国が覇権を掌握する可能性が十分存在したとする。元は、北京に至る

シルクロードと杭州に至る海上路をリンクさせて強力な統合的世界システムを作り上げた。元を仲介者として両者が連携した時点で世界貿易の輪は完成し、前近代「世界システム」は完成した。しかしペストによる人口減と、モンゴル帝国の崩壊による中央アジア後背地からの孤立によって、明の地政学的环境は元の頃と大きく変化し、世界システムは14世紀初頭に崩壊を始めたと論じる。明では海軍力が維持できないまでに経済が崩壊しており、海上覇権を掌握することができなかった。

結論としての第11章では、16世紀に「西洋が勝利した」という事実は、「西洋の制度と文化のみが成功し得た」という議論には援用できず、13世紀の国際交易と生産のシステムは16世紀のものにも劣っていなかったとする。そして、13世紀システムでは多様な文化システムが共存し、西洋が覇権を掌握するシステムとは大きく異なった社会を組織していたことを指摘する。14世紀半ばに発生した、システムの第1の重要な変化はペストその他の疫病による同時多発的な人口減少である。第2の変化は地政学的なものであり、14世紀半ばに中央アジアの統一が解体したこと、モンゴルが中国を失ったことで、陸路と海路のリンクが失われ、世界中にその影響が及んだとする。すなわち、〈東洋の没落〉は〈西洋の勃興〉より以前に発生していたのであり、13世紀に発展した貿易路は征服によってヨーロッパに受け継がれた。この点で〈西洋の勃興〉はすでに存在した世界経済に助長され、それを再構築したといえる。このよう

な議論から、著者は「世界システム」が一樣ではなく、変動しうるという認識の重要性を強調し、世界システムの継続的生起を交替ではなく再構築と考えることを主張する。そして現システムの再構築によって、複数中核をもつ相対的バランスの時代へ回帰することを予見し、共存の重要性を指摘して本書を終えるのである。

さて、長々と内容紹介を続けてきたが、本書の主題は、ヨーロッパ中心主義的世界システム観からの脱却である。アブー・ルゴドは、13世紀の世界システムが地政学的要因によって盛衰したことを明らかにすることによって、16世紀に成立した近代世界システムにおけるヨーロッパの「勝利」が必然ではなかったことを示そうとしている。しかし、本書には少なくとも3点の大きな問題点をはらんでいる。すなわち、(1) 著者の西洋中心主義批判に限界があること、(2) モンゴル帝国の重要性に関する実質的な検討がかけられもみられないこと、(3) 「世界システム」という用語をあえて定義せずに自由に用いるため、論旨に混乱が生じていること、である。

(1) まず注目すべき点は、本書が一見「13世紀の世界システム」を扱っているように見えながら、その問題意識の方向は近代世界システムを向いているという点である。すなわち、本書は、〈「世界システム」論という枠組みを用いて13世紀の世界経済網の在り方を理解する〉という構造をとっていない。近代世界システム論の問題点を検証するために13世紀の事例を道具として用いているのみ

なのである。このため、本書の13世紀理解には (a) 近現代の問題の枠組みがそのまま13世紀に投影される。(b) 13世紀に「世界システム」が存在したことが議論の前提となる、という2つの欠陥が生じることとなる。(a) は具体的にいえば、EastとWestという、当時は辺境のヨーロッパにしか存在しなかった二分法が13世紀の全世界に適用されることである。この結果、本書はヨーロッパ中心主義的世界システム観からの脱却を最終的な目標に掲げていながら、(それゆえにこそ) 13世紀の世界システムを論じる際に、なぜか西洋（イタリア商人やポルトガル）の「東洋」との接触や通商を軸に据えるのである。このような二分法自体が13世紀の世界経済の在り方を全く反映していないことは、少なくとも日本の読者には自明であろう。本書の執筆意図がヨーロッパ中心主義からの脱却であり、欧米では事実そのように評価されたにもかかわらず、実際には無自覚なヨーロッパ中心主義を温存している。本書は欧米人であるジャネット・L・アブー・ルゴドが欧米人読者を対象として執筆したものであり、世界的な広がりでの読者の期待に応えられるものではない。そこに現れているのは、著者が「世界システム」と称する世界交易網に対するヨーロッパ中心的評価であり、遊牧民であるモンゴル人に対する無自覚な野蛮人視である。本書は、13世紀の世界経済の在り方を論じた本ではなく、その中でのヨーロッパ人の活動を切り取ったものにすぎない。13世紀の世界システムの核心がモンゴルにあるにもかかわらず、本書の構成が西か

ら東へと進むことも、このような問題意識を如実に反映している。

(2) 上述のように、本書にはヨーロッパ中心史観の素朴な反映として、モンゴル人（もしくは遊牧民）を野蛮人視する傾向が存在する。東洋史家杉山正明氏の著作にふれた者は、モンゴル帝国が国家・経済・社会の各方面において卓越した構成員を持っていたとするその議論に新鮮な驚きを抱くであろう。これに対してアブー・ルゴドはモンゴル支配の描写を de Rachewiltz に大きく拠っているが、その記述は明らかにモンゴルに敵対的であり、彼らを「圧制者」「搾取者」としている (p.156)。そして彼女自身のモンゴル国家に対する評価も the parasitic nature of tribute as a basis for the state というものである (p.182)。ペルシア語と漢文を自由に操るモンゴル研究は、すでに杉山氏の研究のような挑戦的な試みを生み出しているのである。少なくともアブー・ルゴドの描くような旧態依然としたモンゴル帝国像では、彼らが「13世紀の世界システム」の実質的な主導者であることを理解することはできない。

事実、アブー・ルゴドは元が陸上交通と海上交通を連結させたことが「13世紀の世界システム」の完成に決定的な意味を持ったことを認めている。そして、モンゴルが中国から撤退したことによってこの連結が解体し、明だけでなく世界システム全体の衰退につながったと主張する。しかし、驚くべきことに、この正当かつ重要な認識は本文 373 ページ中 346-347 ページになって初めて、何

の前触れもなく突然現れるだけでなく、その後その内容に関して何の検討もなされない。それは唐突に宣言されるのみなのであり、アブー・ルゴドのこのような圧政的な「寄生的貢納国家」にして単なる facilitator が、いかにして世界全体に影響を及ぼしえる体制を確立しえたかを問うことすらない。モンゴル帝国に関して著者が論じるのは、その中央アジア路の統一によって、いかにヨーロッパ商人がモンゴルにまでその行動範囲を広げたかという主題のみなのである (ch.5)。

モンゴルの支配システムに関するアブー・ルゴドの認識不足はこれにとどまらない。本書の記述からはイルハン国の重要性に関する積極的な検討もチャガタイ・ウルスの意義も完全に抜け落ちている。さらに致命的なのは、ペルシア語に関する認識の欠如である。著者は Asian, Arab and Western forms of capitalism (p.15) というように、中東をアラブと同一視する傾向がある。しかし、当時イラク以东中国までのリング・フランカがペルシア語であったことは常識であろう。モンゴルの商業力を支えたのはイラン系ムスリム商人だったのであり、そこではヨーロッパ商人もペルシア語を用いたのである。

このような著者のモンゴル、中国に関する議論の浅薄さは、著者が欧米諸語以外の言語能力を持っていないことに由来する。このためアジアや中東に関する著者の議論は常に他の研究者の視点を通して行うしかなく、屋上屋を重ねる結果となっている。もちろん、本書のような野心的なテーマの研究書に、あらゆる原語史料を読解する能力を要求するのは

過酷であろう（しかし、決して理不尽な要求ではないと考えたい。原語史料を通さない歴史研究など、フィールドに行ったことのない地域研究のようなものである）。少なくとも、アラビア語、ペルシア語、中国語のどれかひとつでも原語史料に接する真摯さが求められよう。ある程度の限界はあるにせよ、第三者の目を通した情報を組み合わせるだけで、比較研究が可能であると考ええるならば、あまりにナイーブである。もっとも、このような批判は、ある意味で的はずれであるかもしれない。著者の関心は13世紀の世界の理解にあるのではなく、ヨーロッパを中心とした近代世界システムを論じる材料としてのみ *Before European Hegemony* を論じているのであるから。

(3) 最後に、「世界システム」という概念自体の問題であるが、上述 (b) のようにアブー・ルゴドは13世紀に「世界システム」が存在したことを議論の前提としている。ここでも、歴史学的な意味で13世紀に「世界システム」が存在したかどうかは、実際には著者の関心ではない。なぜなら著者の論点は、13世紀の世界システムの盛衰が地政学的要因に拠ることを示すことであって、そのためには「世界システム」が存在しなければならぬからである。しかし、そもそも「世界システム」とはどのような概念なのだろうか。16世紀以前にも世界的な国際通商ネットワークが存在していたことは、現在ではもはや自明であろう。にもかかわらず、これを13世紀のそれを「世界システム」と呼

ぶからには、「世界システム」をそれ以前の国際通商ネットワークから峻別する指標が必要なはずである。ところが、アブー・ルゴドはこの議論を行わない。それどころか、あえて定義を行わないと宣言し、事実、本書の中でもその使用は実に曖昧かつ自由なのである。たとえば氏の議論では、①13世紀すでに世界システムが存在し、そこにヨーロッパが参入したことによって変化が生じたという議論と、②13世紀に初めて世界システムそのものが形成されたという議論が無自覚に混在している。

アブー・ルゴドはヨーロッパを *new comers to the ongoing world system* (p.158) と論じる。これは明らかにヨーロッパの参入以前に世界システムが存在したことを前提とした記述である。これに対して、14世紀にエジプトが世界経済に統合されることによって、エジプトのヨーロッパへの原材料輸出に歯止めがかからなくなったという議論 (P.235) は、13世紀以前にはエジプトは（ヨーロッパと異なり）世界経済に統合されていなかったという前提を設定しなければ理解ができない。もし①によった議論を行うならば、「エジプトを取り巻く世界経済にヨーロッパが参入したことにより、世界経済の構造が変容し…」と論じるべきであろう。このようにアブー・ルゴドの「世界システム」「世界経済」といった言葉の使用法は、意図的に曖昧なのであり、その結果、本書は世界システム論としての有効性を持ち得ない。

結論で展開される世界システム再構成論は、この議論の混乱に一定の理解をもたら

す。アブー・ルゴドは世界システムを、ローマ帝国以来、解体構築を繰り返すブロック細工のようなものと考えており、そのなかで特定のパーツの重要性が変化すると論じている。世界システムは、過去にすでに存在しつつ、その時点では新たに再構築されるものとして叙述される。そのためある時点での国際通商ネットワークが世界システムであるともないともとれるような議論になるのである。

しかし、もしそのような理解を提示したいのならば、何が「世界システム」であり、何がそうでないのか、その基準を明示する必要は高まるであろう。著者の議論は、13世紀の世界システムと16世紀の近代世界システムが本質的に同じ性格をもっているという無自覚的な大前提を有している。それだからこそ、13世紀の地政学的な変化によるシステムの興亡から敷衍して、近代世界システムにも同様の性格を看取すべきであるという議論が成立する。もし両者が本質的に異なった性格をもつシステムであるならば、全体の議論そのものが成立しないのである。それだからこそ、著者の議論において「世界システム」

の定義は致命的な重要性をもつはずである。

以上、本書の問題点のみを指摘する書評となってしまったが、ヨーロッパ中心主義の打破という本書の問題意識自体はまったく正当なものである。残念ながら、手法的な問題と著者の能力的限界ゆえに、その成果自体は不満足なものに終わってしまった。しかし、近代世界システム論にヨーロッパ中心主義的性格を認識し、その解体と相対化を図ろうとする試み自体は十分に評価されるべきであろう。問題は、その目的のために13世紀の「世界システム」自体の十分な検討が為されていないことなのである。その点では杉山氏に限らず、日本の優れたモンゴル研究の数々や、家島彦一氏のきわめて実証的な中世イスラーム国際交易網とインド洋交易の研究などが、欧米研究者によって参照される環境を整える必要がある。いずれにせよ、本書の存在を第一歩として批判的に継承した、新たな研究の展開を待ち望みたい。

(清水和裕、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)